

## 王であるキリスト

2014.11.23

マタイ 25・31-46

今日の日曜日は、教会の典礼暦では今年最後の主日になります。来週の日曜日には、典礼暦の新しい年の始まりとしての待降節を迎えることになります。

教会の典礼暦は待降節をもって始まり、今日の、王であるキリストの祭日を祝って、一年を締めくくります。このような典礼暦に従ってささげられる日曜日ごとのミサに参加することによって、わたしたちが生きる一年一年の時の流れは、わたしたちがカトリック信者となることによって、わたしたちの中にお迎えしたイエスとともに歩む旅路となるのです。そのように受け止めることが出来るなら、典礼暦の一年の最後の主日の今日の王であるキリストの祭日は、わたしたちがカトリック信者として歩む人生の最終目標をわたしたちに強く意識させてくれます。

わたしたちが信仰によってわたしたちの中にお迎えしたイエスは、カトリック信者としての信仰をもって歩むわたしたちの人生の中にもいてくださるだけではありません。わたしたちとともに歩んでくださるイエスは、わたしたちに先駆けてあの十字架の死を越えて復活し、父なる神の右の座に就かれて、そこでわたしたちを迎えてくださるのです。父なる神の右の座に就かれたイエスが、父なる神とともにわたしたちを迎えてくださる天の玉座こそが、わたしたちがカトリック信者として目指すわたしたちの人生の最終目標なのです。王であるキリストの祭日の今日の福音は、わたしたちにそのことを、あらためて思い出させようと語りかけています。

世の終わりとか最後の審判という信仰の教えは、わたしたちに恐怖を感じさせるかもしれません。幼児洗礼を受けて、子供の頃に公教要理に通ったことのある信者さんたちの脳裏には、その頃の神父様やカテキスタの先生に教えられた、最後の審判の話が、あの時の強烈な印象は薄れてしまったかも知れませんが、今でも深く焼きついていることでしょう。子供の頃にそのような経験をしたことのない信者さんたちにとっても、最後の審判ということばは、写真集などで見たことのある、バチカンのシスチナ礼拝堂に描かれたミケランジェロの最後の審判の場面を思い起こさせるかもしれません。

わたしたちが受け入れたカトリックの信仰の教えは、今でも変わっているわけではありません。最後の審判の教えは、初めてそれを聞いた子供のころの恐ろしい印象や、生き生きとした想像力をもって、あのミケランジェロの作品を思い起こす時、確かに、わたしたちを息苦しくさせます。けれども、わたし

私たちはカトリックの信仰を生きる者として、わたしたちが信じる信仰がもたらすそのような息苦しさから逃げ出そうとしてはならないのです。

世の終わりや最後の審判の信仰の教えは、時の流れの中に生きるわたしたちに全く新しい時間感覚をもたらします。

この世に生きるわたしたちは時を流れとして捉えています。そのような時間感覚の中では、わたしたちが生まれたのも死ぬのも、わたしたちの上を流れる滔々とした時の流れの中の小さな出来事に過ぎません。わたしたちが自分の人生の中で経験した一つ一つの出来事も、それを思い出すことはできても、今となっては、あの時に戻ってもう一度経験することはできません。同じ時に同じ経験をした者たち同士が集って、思い出話をするのができても、その仲間たちも、一人また一人と時の流れの中に飲み込まれるようにしてわたしたちのもとから去って行きます。いつかこの自分の意識が消えてゆく時、わたしたちが人生の中で経験したことの全ては、跡形もなく、時の流れの中に消えてゆくのです。そのようにして過ぎ去ってゆく時間の流れの中に生きるわたしたちにとって、わたしたちが生きている今のこの時に果たしてどのような意味があるのでしょうか。全てが時の流れの中に消えてゆくとするなら、わたしたちが懸命に生きている今のこの時にどれほどの意味があると言えるのでしょうか。自分の人生を懸命に生きてきたわたしたちが、ふとこのような空しさの想いに囚われる時、世の終わりや最後の審判の信仰の教えは、わたしたちにとって福音となります。

わたしたちのこの世のいのちは、滔々と流れる時の流れの中にたまたま浮かび出て、やがて消えてゆく泡のようなものではないことを、わたしたちは教会と出会うことによって知ったのです。わたしたちの教会の信仰の中には、わたしたちがこの世で経験するのとは違う時間感覚が息づいているのです。それが、世の終わりや最後の審判の信仰の教えがわたしたちにもたらしたものです。この信仰を受け入れることによって、わたしたちは、このわたしたちの世界に流れる時の流れの中からすくい上げられ、自分の人生を生きただけの人間として、今や神の右の座におられるわたしたちが信じたイエスの御前に立つ者とされたのです。わたしたちは他の被造物のように時の流れのままに生きるのではなく、時の流れの中にあって自分が生きたと言える、自分の人生と言えるものを持つ存在であることをこの信仰によって知ることが出来たのです。わたしたちは時の流れのままに生きたのではなく、自分が生きた人生の責任を問われる者として、最後の審判の場に立たされるのです。この信仰を受け入れることによって、わたしたちはわたしたちが生きる今のこの時を、わたしたちに課せられた課題として受け止めるべきことを知ったのです。今のこの時をどのように生きたか

が、最後の審判において問われることを知ったからです。

今日の福音は、最後の審判が、信仰によってそれを受け入れたわたしたちのためだけのものではないことを告げています。「全ての国の民」が栄光の座に就かれた人の子・イエス・キリストの御前に呼び集められ、その裁き場に立たされるのです。ここに語られている、栄光の座に就かれる人の子・イエス・キリストこそが、わたしたちが今日祝っている王であるキリストのお姿です。

今日の福音に示されている、わたしたちを最終的に迎え入れてくださる王であるキリストのおことばを、あらためてしっかりと心に刻みたいと思います。

「あなたがたは、わたしが飢えていた時に食べさせ、のどが乾いていた時に飲ませ、旅をしていた時に宿を貸し、裸の時に着せ、病気の時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれた。」

このイエスのおことばは、それぞれの時の流れの中に生きているわたしたちの心にどこまで響いているのでしょうか。今年、わたしたちはその時の流れの中で未曾有の災害を経験しました。自分たちの時の流れを断ち切ってまで、その災害に巻き込まれた人々に支援の手を差し伸べた多くの善意の人々の姿を目にしました。時は流れてゆきます。けれども、わたしたちが王であるキリストの裁きの座に呼ばれる時、わたしたちがその時の流れの中で遭遇した今回の事態について、わたしたちを裁かれるイエスは、わたしたちにどのようなおことばを下されるのでしょうか。

信仰によって、最後の審判の教えを受け止めたはずのわたしたちは、このことをもう一度真剣に反省するように求められていると思います。最後の審判において、王であるキリストはご自分がわたしたちにもたらされたものを、わたしたちがどこまで受け止めたかによって、わたしたちを裁かれるのです。イエスがわたしたちにもたらされた愛の掟に従って生きることが出来る助けを求めて、今日のミサをおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高